

『会社はだれのものか』

著者／岩井克人(平凡社 1400円税別)

法人論という独自の切り口で、ポスト産業資本主義下の会社のありようを語ったベストセラー「会社はこれからどうなるのか」から2年。本書はそのエッセンスを抽出して深めつつ、トピカルな話題を盛り込んだ姉妹編にあたる。

「世間の話題をさらった」「会社の買収問題」という視点から整理し直せば、前著の内容はより理解しやすくなるのではないかと。最大の執筆動機はその点にあります。同時に現場の経営者対話を重ねる中で浮上したテーマ、信用供与論や会社の社会的責任論等についてもその原理、現代の意味を考察しました」

法人企業のしくみは二階建て構造で理解できる

本書の一番のポイントであり、議論のベースとなるのは、冒頭部分に掲げられた「会社の二階建て構造」論だ。「本来モノではない会社が、法律上ヒトとして扱われる」「意味の解説を通じ、会社とは何か、その存在の本質は何か」が明快に提示される。

すなわち、二階部分では株主が株式という形で会社をモノとして所有し、一階部分では会社がヒトとして会社資産を所有する。この二重の所有構造が著者の法人企業論の骨格である。

以上を踏まえ、著者はコーポレート・ガバナンス、「経営とは何か」へ議論を進めていく。そ

こで強調されるのは経営の独自性と、経営者の役割の重要性だ。「モノに過ぎない会社がヒトとして振る舞う。そこでは経営者が会社という人形に命を吹き込む人形遣いとなり、すべてを信任された後見人のような仕事をします。会社に対しても社会に対してもその責任は重大です。すなわち経営者は株主の代行者ではなく、第一義的にヒトとしての会社に、忠実に任務を遂行することを義務づけられた存在なのです」

こうした独自の視点に立つ著者からすれば、会社は株主のものとする株主権論は二階部分だけを見たものに過ぎず、会社の本質に対する無理解がそうした論を生んだと言っ

ポスト産業資本主義時代の企業経営の原理とは

ライブドアによるフジテレビ買収騒動を通じて多くの人がもった素朴な疑問、「会社はお金で買えるのか」というテーマも、そんな思考の延長線上から眺めると理解しやすくなる。

「お金を出せば、株券、すなわちモノとしての会社を買うことはできます。しかしそれは、組織としての会社、そこで働く人を買うことには、必ずしもなりません」

工場や機械等の生産設備が利益の源泉だった産業資本主義の時代と比較すると、ポスト産業

資本主義の時代には知識を有し、新たなアイデアを生む人間そのものに焦点が当てられる。はたしてそこで従来のような企業買収手法がどこまで有効なのかは未知数だ。

お金の価値が下がり、ヒトの価値が上がる現代を、著者は資本主義の大きな転機ととらえている。そんな時代の経営、とりわけ金融の役割と資金調達のあるり方についても本書は多くの示唆を与えてくれる。

社会的責任を果たすのは企業にとって本質的条件

最後に、本書でも紙幅を割いて詳述されている企業の社会的責任論について、「会社の二階建て構造論」を唱える著者ならではの見解を紹介しよう。

「生身の人間は生まれながらに基本的人権をもつ存在と見なされます。しかし本来ヒトではない法人がヒトとして存在するのは、社会の承認が前提とされます。逆にいえば、社会に存在する価値があつてはじめて会社は会社として認められるのです。」

よって会社が広い意味での社会的責任を果たすことは、経営の副次的課題ではなく、もともと本質的な条件といえます。そうした意味でいえば、会社は社会のものなんです」

一貫して法人論の原理から会社の行動原理をとらえる著者の面目躍如の主張といえるだろう。



プロフィール
岩井克人
いわい・かつひと

東京大学経済学部教授。1947年生まれ。東京大学経済学部卒、マサチューセッツ工科大学Ph. D.。2001年より2003年まで東京大学経済学部学部長を務める。著書に『貨幣論』『会社はこれからどうなるのか』他多数。



『認められたい!』

著者/太田 肇 (日本経済新聞社 1400円税別)

個人を生かすために組織はどうあるべきか。このテーマを考えるとき注目すべきなのが、人間の承認欲求エネルギーの大きさだ。人事制度の構築にあたって、「認められたい」という気持ちをいかにうまくマネジメントするかが重要なカギになる。

成果主義は、金銭的報酬でモチベーションを前提にしている。しかしそこでは、事実上、多くの報酬を得ることが唯一の承認のシンボルとなる。よほど適切な評価がなされなければ、本人にも周囲にも誤ったシグナルが送られ、やる気をそぐことになりかねない。成果主義の失敗の大きな原因はこの点にあると考える。

経済成長期を終え成熟社会化が進む日本では、人はお金だけでは動かなくなっている。むしろその背景にある承認欲求そのものに焦点を当てたモチベーション方法が効果的なのだ。

「世間の評価」を活用し承認欲求をマネジメント

具体的戦略としては、働く個人の評価の場を組織の中から外へ広げ、顧客や取引先等、「世間の評価」をうまく活用することが考えられる。組織内の地位や金銭的報酬はゼロサムゲームとなるため全員に分配することが難しいが、「世間の評価」という外部の資源は無限に利用できる。こうしたメカニズムを機能さ

せるには、仕事の裁量と権限を明示的に個人に委譲し、同時に個人の名前を出して仕事をさせることが必要だ。働く個人の立場からすれば、「自分が実力を発揮し、いい仕事をしたことで、世間の評価が自分にかえってくる」という道筋が見えることで、がぜんやる気が出てくる。組織はそんな個人のためのインフラとなり、評価のフィードバック等をコントロールすることでサポート役を果たせばよい。

個人の独立性が高い職場ほど、ワーカー同士にも相互承認、リスペクトしあう関係が生まれ、業績も上がるといふ好循環が生まれる。とりわけ承認欲求に敏感な日本人の特性を考えれば、このあたりにハッピーな組織づくりのヒントがある。(太田談)



太田 肇

おおた・はじめ

同志社大学政策学部教授、経済学博士。1954年、兵庫県生まれ。三重大学助教授、滋賀大学教授等を経て現職。著書に「選別主義を超えて」他。

『職業外伝』

著者/秋山真志 (ポプラ社 1500円税別)

本書は、鉛細工師、俗曲師、銭湯絵師など、滅びゆく日本の伝統職に従事する12人を訪ね、仕事人としての肖像を描きだしたノンフィクションである。それぞれの職業の歴史的淵源を盛り込みながら、紆余曲折の人間ドラマを浮き彫りにした。

取材執筆を通じて考えさせられたのは、天職とは何かということだった。本書に登場する職業人の多くは、迷走や放浪の末、まるで神に呼びかけられ、魅入られたかのように一生の仕事に出会ったように見える。職業が生き方を規定するのか、生き方が職業を決めるのか。いずれにせよ彼ら彼女らの「そうでしかありえなかった」人生では、両者が渾然一体となっている。何かに突き動かされるように生きてきた人間の魅力は、独特の光を放つ。

滅びゆく日本の伝統職に従事する12人の肖像

昨今、フリーターやニートが増えているという。何のために働くのか夢やモチベーションをもてない若者、自分に合った仕事とは何かと悩み迷う若者にもぜひ本書を読んでほしい。

まず言えるのは、会社勤めだけが人生ではないということだ。そうしたルートから外れたとしても、身を立って生きていく道はさまざま存在を知ってほしい。

同時に、いかに好きな仕事であっても、そこにたどりつき道を歩み続けるには大変な努力が必要だということも伝えたい。人生は職業生活の苦闘から練り上げられる。自信や充実感はその中から生まれるものだろう。

本書に託したもうひとつのメッセージは、日本の伝統に自信と誇りをもち、その固有の価値をもう一度見直そうということだ。日本人は、先祖代々受け継いできた固有のすばらしい文化、生活様式をもつ。本書で取り上げた職業は、いずれもそれに深く根ざした技芸に関わるものばかりである。

前記したような職業選択に迷う若者たちの中にも、こうした世界でならいっきと自分の持ち味を発揮できる人材が埋もれているのではないか。(秋山談)



秋山真志

あきやま・まさし

フリーランスライター兼エディター。1958年、東京生まれ。明治大学文学部卒業。寄席とJAZZと居酒屋とアジア貧乏旅行を愛する。